

時の動き

コロナ禍でも安心の医療を！

立川相互病院・呼吸器内科医師 奥野 衆史

昨年4月、私が内科医として働く立川相互病院（東京都立川市）の窓に、大きな

メッセージが張り出されました。『医療は

限界 五輪やめて！ もうカンベン オリ

ンピックむり！』。このメッセージは、コ

ロナ禍の最前線にある病院からの悲痛の叫びとして瞬く間に拡散され、SNSで20

万件を超える「いいね」が付きました。

当時は大阪を中心として第4波の最中で

した。関西からは悲惨な医療現場の状況が日々伝えられ、一方、東京では五輪に向け

てうごめく政治やIOCの姿がメディアで

連日報道されていました。当時の病院の様

子や、掲示に至る経緯は病院ホームページ

に掲載されています。

(<https://www.tkenseikai.jp/fachi-sou/news/info/20210510.html>)

同病院では第1波から新型コロナウイルスの診療にあたり、述べ数百人が入院しまし

た。私は、診療チームの一員として主に酸

素投与を要する中等症や人工呼吸器を付ける重症患者を担当してきました。

多くの患者さんが無事に退院していきま

したが、隔離病棟で息を引き取った患者さ

んも少なくありません。東京五輪とともにやってきた第5波は、それまでとは比にな

らないほど大きく険しい波でした。連日、

患者搬送依頼の電話が鳴り続け、電話口か

ら語られる患者の容態は、悉く医療を必要

とするものでした。しかし、既に病院は満

床で受け入れることもできず、多い日は一

日に50件以上も断りました。入院中の方でも、力およばず、目の前で亡くなった患者さんも何人もいました。自分の親よりも若い患者さんもありました。

あれから半年が経ち、国民の多くがワクチンを接種し、変異株で軽症化したのでは、などの報道があります。しかし実情は深刻です。1月下旬の当直業務では、夕方5時から翌朝8時まで、保健所や消防庁からのコロナ患者受け入れ要請の電話が何件もかかってきました。

深夜4時に私の電話が鳴りました。90代の患者さんと80代の患者さん、どちらもかなりの量の酸素投与が必要で、何時間も搬送先を探している状態でした。



中央で人工呼吸器を扱っているのが筆者

その夜はそれまでに3人のコロナ患者さんの緊急入院を受けており、いずれも酸素投与を要する状況でした。さらに、入院中だった別のコロナ患者さんの状態が急速に悪化したため、近隣の高次医療機関への緊急転院も重なりました。他にも救急外来で

のPCR検査や一般外来業務もあり、私の体力的にも、他のスタッフのマンパワー的にも、新たに2人は受けられない状況でした。結局、病院から近い方の患者さんを受け入れることになりました。受け入れの返答をした際、電話の向こうからは歓声が聞こえました。既に救急要請から約10時間が経ち、救急隊は3つも交代してました。真つ先に対応する救急隊員や、辛抱強く搬送先を探し続ける保健所や都職員の方たちにも頭の下がる思いです。

医療現場には沢山のスタッフがいます。が、学校や保育園の感染拡大により、子どもが感染したり濃厚接触者になったりするために欠勤を余儀なくされるスタッフも増えています。いままで以上にマンパワーが問題になっています。

感染が拡大すると、患者さんを受けたくても受け入れられなくなり。病床が足りない、人手が足りない、時間が足りない……。電話の向こうには、まさに医療

を求めている患者さんがいるのに……。当然のことながら最も大変なのは患者さんです。憲法で、健康で文化的な生活が保障されており、皆保険があるこの日本で、必要な医療が受けられない患者さんが出てきてしまっているのです。

感染拡大を防ぎながら社会の機能を保つためには、十分な検査・診療体制の拡充、家庭や店舗への補償、医療も含め教育現場や介護現場などエッセンシャルワーカーへの補償が重要です。

また、コロナ前から保健所の数や予算は減らされ、非正規公務員は増えています。医療介護現場は慢性的な人手不足と過重労働に悩まされています。教育現場は狭い教室に30人から35人が詰め込まれ、教員の業務もどんどん増えています。これまでもんな社会を作ってきたのかをよく顧み、これからどのような社会を作っていくかを考える必要があります。

(おくの しゅうし)